

【研究ノート】

徳・技能・コツ ——予備的考察——

田中朋弘

Virtue, Skill and Knack: Preliminary Study

Tomohiro TANAKA

要旨 (Abstract)

This paper provides a preliminary study of the thesis that virtue is a skill, or that virtue and skill are alike, to clarify how to think about it. First, I will take up Julia Annas' discussion (Annas 1995) of the similarity between virtue and skill to see what position she takes. Next, I will take up the arguments of Matt Stichter (Stichter 2007), who raises some questions about Annas' interpretation, and examine the validity of his criticism. In doing so, I will pay special attention to the perspectives from which they discuss skills. In addition to Annas' and Stichter's discussion of the relationship between virtue and skill, I will show it is also necessary to consider more the relationship between skill and knack when thinking about them.

キーワード (Keywords) : virtue, skill, knack

はじめに

義務論や帰結主義を議論の中心とした従来の規範倫理学においては、人が道德性をどのようにして身につけるのかということよりも、道德性の本性を探る議論に強い関心が向けられていた。確かに、ヘア (Hare, R.M.) の倫理学理論のように、道德性と教育や発達の関係について部分的に論じられたものがないわけではないが、全体としてみて、そうした関心がこの領域で中心的であったとは言えない。このような状況が変わり始めたのは、アンスコム (Anscombe, G. E. M.) の「現代の道德哲学」(Anscombe 1958) という論文を端緒とする徳倫理学への関心の高まりであることは、よく知られている。その後、1970年代から1980年代にかけて、フット (Foot, P.) やマッキンタイア (MacIntyre, A.) による議論が展開され、徳とは何かという主要な論点に関する検討が進められた。

さらにその後、ハーストハウス (Hursthouse, R.)、スロート (Slote, M.)、スワントン (Swanton, C.)、アナス (Annas, J.)、ザグゼブスキ (Zagzebski, L.) などの論者が、それぞれの立場から徳とは何かについて積極的に論じている。

ファン・セイル (van Zyl, L.) によれば、現代徳倫理学は三つの立場に大別される (van Zyl 2018, pp. 14-16)。すなわち、(1) エウダイモニア主義またはアリストテレス主義の徳倫理学 (ハーストハウス)、(2) 行為者ベースの徳倫理学—感情主義的徳倫理学 (スロート)、(3) 多元的徳倫理学—目標中心の徳倫理学 (target centered virtue ethics) (スワントン)、である。それぞれの論者は、a) 徳とは何か、b) 徳と幸福の関係、c) 徳と動機、d) 徳と知恵・知性、e) 正しい行為、などについて立場が異なっており、それぞれに特徴的な性質を持つ。ファン・セイルの区分には、(4) 模範主義 (exemplarism) の徳倫理学 (ザグゼブスキ) を加えることもできるであろう。

このように、徳とは何かをめぐる議論は未だ決着がついていないという様相を呈しているが、上述の問題群には、徳と技能の類似性に関する議論が含まれる。徳が何らかの点で技能に似ているという議論は、プラトンやアリストテレスの時代から既に論じられているが、徳倫理学を全体としてみた場合、このテーマはそれほど中心的な課題とみなされていないようにみえる。そこで本稿では、「徳は技能である」、または「徳と技能は似ている」というテーゼをどのように考えたらよいのかを明らかにするための予備的検討を行う。本稿が「予備的」であるというのは、徳と技能をめぐる議論は、徳と技能の類比を土台に論じられるべき議論だが、それを直接扱う前に、そもそも技能とは何かについても考える必要があると考えられるからである。

そのための出発点としてまず、アナス (Annas, J.) による徳と技能の類似性に関する議論 (Annas 1995) を取り上げ、アナスがどのような立場をとるのかを確認する⁽¹⁾。アナスは、現代の徳倫理学者の中で、とりわけ徳と技能の関係について注意を払っているように思われるからである。次いで、アナスの解釈に対していくつかの疑問を投げかけたスティクター (Stichter, M.) の議論 (Stichter 2007) を取り上げて、そのアナス批判が妥当であるかを検討する。またその際筆者は特に、技能について両者がどのような観点から論じているかということに着目したい。「徳は技能である」または「徳と技能は似ている」という主張をするためには、そもそも徳とは何か、技能とは何かについての検討が必要になる。しかし徳とは何かを説明するために技能との類比を用いようとする場合、当該の論者がもともと持っている徳に関する特定の解釈—そうした徳の枠組み—から、技能について論じる傾向があるのではないと思われるからである。本稿では、徳と技能の関係性に着目するアナスとスティクターの議論に加えて、それらについて考える際には、技能とコツの関係についても考察する必要があるのではないかという点を提起する。

1. 技能としての徳—アナスの議論

アナスは、「技能としての徳」(1995) という論文において、徳と技能⁽²⁾ の関係について論じる。アナスによれば、古代ギリシアの哲学者の多くが徳と技能について論じていたが、最も注目に値するのはプラトンの初期対話篇におけるソクラテス的な解釈である。他方、アリストテレスは、徳と技能の類似性についてかなりの程度受け入れていたが、「徳が技能である」とまでは認めていないと、アナスは主張している (Annas 1995, p. 228)。アリストテレスは、技能を主として「制作 (*poiēsis*)」にかかわる能力とみなし、徳は「実践 (*praxis*)」に関わるとみなして両者を区別していたというのが、その主たる根拠である (ibid., p. 241)。とはいえ多くの道徳哲学者が、「徳は技能である」とまでは言わないにしても、その弱いテーゼとしての「徳と技能には類似性がある」という点では一致していたと見なされている (ibid., p. 228)。ただシアナスは、古代の哲学者たちの主張を時代的な背景やそれに基づく対象理解の方法を度外視してそのまますべて肯定するという立場はとらず、現代社会の中でそれがどのように考えられるかという視点を維持している。

徳と技能の類似性に関してアナスが着目するのは、ソクラテスが技能の知的な側面に関心を持っていたという点である。本物の技能 (*genuine skill*) には、初心者と熟達者という違いがあり、しかも、真に技能を持つ者は、単に長くそれを経験しているというだけではなく、それをマスターしているという点において違いがある。ソクラテスは、技能に関わる目的を実現しようとする場合、多数者の投票ではなく、熟達者の専門的スキルが必要だと考えている。そしてアナスは、このことはソクラテスの

徳に対する立場でも同じだと解釈している (ibid., pp. 230-231)。

アナスによれば、本物の技能には三つの特徴がある。第一に、それは教示可能であること (教示可能性) という特徴を持つ。技能は、ソクラテスがコツ (knack) と呼ぶようなもの (それをともかくやってみることや、見て学ぶことで、習得されるようなもの) よりも知的に複雑である。第二に、技能は、集合的な仕方では積み上げられた情報の断片をただ学ぶような営みではなく、熟達者の統一的把握と結びついた様々な事柄をマスターすることを含んでいる (統一性)。そうした統一性は、その領域を統一するような諸原理という観点から対象を見ることができるといえるような仕方ではなされる。

アナスはこの統一的把握については少し詳しく説明している。そこでは、『イオン』におけるイオンの主張 (ホメロスのことは知っているが他の詩人のことは知らないという主張) に対するソクラテスの応答がとりあげられている。ソクラテスによれば、ある人が本物の技能を持つというのは、その分野全体に適用される諸原則を把握することであるので、部分的にしかそれができないということは、それがまったくできないということと同じである (ibid., pp. 231-232)、と。

第三の特徴は、『ゴルギアス』のソクラテスに倣って、技能を単なるコツから区別するのは、「説明をする」能力にあるとみなす点である (説明可能性)。これは「合理的な説明を与える」ことができることも言い換えられている (ibid., pp. 232-233)。アナスによれば、技能を持つということは、「自分の特定の決定や判断を明確に説明し、正当化することができること」、そして「その技能を定義する原理を一般的に把握したうえで、それを行うことができること」 (ibid., pp. 233) である。

このようにアナスは、ソクラテスの技能に関する関心とその知的構造にあるとみなし、徳と技能がその点で類似しているという解釈を受け入れるなら、先述の技能に関する三つの要件が徳にも妥当すると考える。すなわち、徳の (1) 教示可能性、(2) 統一性 (統一的把握)、(3) 説明可能性、ということである。

アナスは徳と技能の類比論に対して想定される反論として、まず、園芸や自動車整備の専門家 (expert) が存在するのと同じように、徳にもまた専門家がいてということになるのかという疑問をあげている (ibid., p. 237)。確かに、たとえば、自動車整備士が「わたしは自動車整備の専門家です」ということはもっともだが、誰かが「わたしは徳の専門家です」と言うのであれば、それには違和感がある。普通は、その人が徳の実践家として徳の 'expert' であるとは理解せず、徳について研究している人という意味で理解するであろう。これに対してアナスは、徳と技能の類比によって主張しようとしているのは、まずは徳と技能の知的構造の類比性であり、その点において、ほかの人よりも優れている人がいるという意味での "expert" (熟達者) であると説明している。

アナスに加担するならば、徳と技能の類比性を考える場合、「職業的な技能」について考えなければならぬというわけではないので、かならずしも職業的な技能を有した人のようなイメージで、徳の専門家を考えなくてもよいことになる。それは、徳に関して熟達した人 (きわめて有徳な人) ということになるであろう。

第二の反論は、技能にはその技能の目的である予め定められた固定的な目標があるが、道徳においてはそのようなものがないので、徳と技能に類比性を見出すのは不適切であるというものである。これに対してアナスは、「技能には固定された目標があるという考えは、技能 (skill or craft) という概念の直観的な適用の一部に過ぎないこと」 (ibid.)、つまり、技能に関する直観的な概念のあらゆる側面をこのアナロジーに読み込む必要はないことを理解すれば、こうした批判は問題にならないと考え

ている。徳と技能の関係において重要なのは、両者が類似した知的構造を持つというアイデアであり、技能が固定された目標に向けられているという特徴を、徳に対しても適用可能でなければならないと考える必然性はない、と主張している。

アナスの議論を再度短くまとめると、以下のようになる。アリストテレスは徳と技能の類似性を認めていたが、それらが別ものであると考えていた。他方、ソクラテスは徳が技能であると考えており、徳と技能に共通するのは、(1) 教示可能性、(2) 統一性、(3) 説明可能性という三つの要素である。こうした共通性をアナスは、両者が知的構造を持つことと説明している。アナスは、技能に関して専門家が存在するのと同様に徳にもまた専門家がいるということになるのかという疑問に対しては、徳や技能においては優位性に程度の差が存在し、それを高度に実現しているものが専門家 (expert) であると説明する。さらに、技能には固定的な目標があるが徳においてはそのようなものがないので、徳と技能に類比性を見出すのは不適切だという批判に対しては、技能に関する直観的な概念のあらゆる側面をこのアナロジーに読み込む必要はなく、両者が共に知的構造を持つというアイデアが重要だと説明する。

2. 徳の技能モデル－スティクターの議論

アナスの論文に対して、いくつかの批判を打ち出した論者に、スティクター (Stichter, M.) がいる。スティクターは、「倫理的熟達性－徳の技能モデル」(2007) という論文で、徳と技能の類比をあつかう現代の論者がほとんどいない中でのアナスの取り組みを評価する。しかし、アナスはアリストテレスが徳の技能モデルを否定したと解釈し、それゆえ徳の技能モデルをソクラテス的なものとみなした点に異論を唱えている。スティクターは、アリストテレスはたしかに技能としての徳に関するソクラテス的なモデルを否定したが、技能としての徳というモデルそのものを否定したわけではないと主張している。

スティクターは、アナスの徳と技能の類比論における技能の三つの特徴－(1) 教示可能性、(2) 統一性、(3) 説明可能性－について、順に検討している (Stichter 2007, pp. 184-186)。まず(1)の技能の教示可能性については、アナスは、修辞学や料理を技能ではなく単なるコツの例として挙げており、ブルームフィールド (Bloomfield 2000, p. 26) も、著名なシェフの料理に関する説明から、料理には理論がないことを見て取れると主張することを紹介している。アナスのように料理が単なるコツに属する活動であり技能ではないとするなら、料理は、それぞれの人が経験から見て学ぶという形でのみ習得するような能力ということになるであろう。ここでスティクターは、アナスの主張の是非については直接評価を加えていないが、徳と技能が教示可能であるがコツは教示できないという解釈をまず認めて、料理はコツに属するといえる見解にも同意しているようにみえる。

次に、(2) 技能の統一性についてスティクターは、注のなかで、ソクラテス的なこの考え方が直観に反しておりそれをアナスは過小評価しているというヤコブソン (Jacobson, D.) の見解を紹介している。それによれば、心臓外科の専門家である医師が、他の手術はそこまでのレベルにないとして、その医師は専門家とは言えないのかという問いが投げかけられている。スティクターは当初は否定的な見解を紹介するとどまっているが、最終的には技能が統一性を強い意味で持つことについては否定している。

第三の(3)技能の説明可能性についてスティクターは、「直観的には、多くの技能は、独立して識別

可能な製造物を持つという点で、徳とは異なる。またそれらは、徳が要求するようなレベルの明確な反省も必要としない (Annas 1995, pp. 67-68)。』というアナスの説明を引用しながら、アナスが徳と技能の相違についても考察している点を一応は認めている (Stichter 2007, p. 186)。

本人が明確に主張するように、アナスの基本的な立場は、技能と徳の類似性を認め、それらが共通に知的な構造を持つことを認めるということにある。スティクターは、徳がそのような強い知的構造を持たなくても徳と認められる立場として、マクダウェル (McDowell, J.) を挙げている。マクダウェルによれば、有徳な人は、徳について必ずしも明確な概念を持つ必要はなく、徳を示すような行動の理由に特定の徳の概念を入れる必要もない (McDowell 1979, p. 332) ⁽³⁾。つまり、有徳な人は、ある徳を示すような行動をなしたときに、なぜそうしたのかと問われたら、何らかの具体的な徳目にかなっているからと説明できなくても、「そうすべきだから」と答えれば、それでその人の有徳性は認められるということになる。

アナスは技能のうちには強い知的構造を持たないものもあることを認めており、そのうえで、知的な構造を持つ技能こそが本物の技能であり、それこそがソクラテスが技能として考えていたものであるという説明をしている。つまり本物の技能と、普通技能とみなされているものの間には、知的構造という点において乖離があるということである。しかしスティクターの指摘 (Stichter 2007, p. 187) によれば、アナスがあげるいくつかの技能についてはこの説明は妥当だが、別の個所では、本物の技能の知的構造に程度の差があることを認める記述をしているので、説明に不整合があるという。ただ、アナスはいずれにしてもソクラテスに倣って、技能そのものがなんであるかという議論それ自体よりも、技能の中には強い知的構造を持つものがあり、それが徳と類似性を持つと考えられるということで自説が十分擁護されると考えていることが指摘されている。スティクターは、それに対して、アナスの擁護する知的構造を持った技能がなぜ「本物の技能」であり、普通の直観に基づいて理解される「技能」がなぜ本物ではないのかという説明がなされていないこと、また、アナスの考える本物の技能の例は医学だけであり、それ以外の技能についてもっと考えるべきだという (ibid.)。

スティクターは、ハッチンソン (Hutchinson, D. S.) を引用しながら、技能がなんであるかについては長い議論があり、一方ではプラトンとソクラテスのような知性主義者モデルがあるが、他方では、「普遍的な原理を把握するのではなく、経験によって技能が得られる」 (ibid., p. 188) と考えるイソクラテスなどの経験主義者モデルがあるという。アナスはこうした可能性について詳細に論じておらず、端的に知性主義的モデルの優位を論じていることになる。そしてスティクターは、次のように考える。すなわち、アナスはアリストテレスが徳と技能の類似性のある程度認めながら、それらは異なると考えたという点を強調し、アリストテレス的な技能モデルを詳細に検討していない。しかし、アリストテレスは徳と技能の問題について考えていないわけではなく、むしろ経験主義的な技能モデルを支持していた、と。

スティクターは、ハッチンソンの議論を援用しながら、経験主義的な技能モデルについて説明する (ibid., pp. 188-189)。スティクターはハッチンソンに倣って、両者は共に徳と技能の類比を考察しており、医学を例に検討しているが、技能とはどのような知識か、徳とはどのような技能かという点で、アリストテレスとプラトンは逆の見解を持っていると考える (ibid., p. 189)。その要点は以下のとおりである。すなわち、倫理的な徳は習慣によって獲得されること、何かをする方法を知るためには、それを実践しなければならないこと、また徳は医学や航海術のような技能と同じで行為に関わる

ものであり、その記述は厳密さを欠いた概略的 (sketchily) なものになる。さらに、経験から学ばれる一般的な真理が存在することは確かだが、行為に関する事柄の場合、それらはプラトンやアナスが想定したような統一的な普遍的原理にはならない、とみなされている。

スティクターは、アナスのような厳格な知性主義的な徳の技能モデルを採用した場合、多くの専門家が、実際には専門家ではないという結論を支持しなければならなくなるとして反対している。また基本的には、経験主義的なモデルの方が直観的には説得力があり、さらに、ドレイファスら (Dreyfus, H. and Dreyfus, S. 1986, 1991) の研究 (彼らが提唱した技能の発達段階モデルはドレイファスモデルと呼ばれる) によれば、「専門家は一般的に規則や原則を適用せずによく行動するので、専門家が原則を参照して自分の行動を説明するのが難しいのは当然である (Stichter 2007, p. 191)」という実証的な研究結果を援用している。また、ベナー (Benner, P.) (Benner 2001) はドレイファスモデルを用いて看護師の技能の発達段階について検討しているが、ベナーの実証的な研究からもまた同様の結果が得られている。すなわち、達人看護師と呼ばれるような専門家であっても、しばしば自分の行為を言語によって正当化することの困難があることが確認されている。さらに、心理学者による最近の研究でも、このような傾向は支持されていることが示される (Bloomfield 2000)。

スティクターの議論を以下にまとめる。スティクターの基本的な主張は、アリストテレスはたしかに技能としての徳に関するソクラテス的なモデルを否定したが、技能としての徳というモデルそのものを否定したわけではない、ということである。スティクターは、アナスによる徳と技能の類比論における技能の三つの特徴について、(1) 技能の教示可能性に関しては、アナスが修辞学や料理を技能ではなく単なるコツの例として挙げていることを指摘し、著名なシェフの料理に関する例から、料理は技能ではなくコツであるという見解を認める。次に、(2) 技能の統一性については、例えば医師の技能を例に挙げた場合、ソクラテス的なこの考え方が直観に反しており、それをアナスは過小評価しているという見解を紹介し、この反アナス的な見方を否定していない。(3) 技能の説明可能性については、アナスが、技能のうちには強い知的構造を持たないものもあることを認めている点をスティクターは一応評価している。しかし他方で、アナスが本物の技能の知的構造に程度の差があることを認める記述をしているので、この説明には不整合があると指摘している。

スティクターは、ハッチンソンに倣って、技能に関してはプラトンとソクラテスのような知性主義者モデルとイソクラテスなどの経験主義者モデルとがあり、アリストテレスは経験主義的な技能モデルを支持していた、と主張する。さらに、アリストテレスとプラトンは逆の見解を持っていると考えて、倫理的な徳は習慣によって獲得されること、何かをする方法を知るためには、それを実践しなければならないこと、また徳は医学や航海術のような技能と同じで行為に関わるものであり、その記述は厳密さを欠いた概略的 (sketchily) なものになると考える。またスティクターは、アナスのような厳格な知性主義的な徳の技能モデルを採用した場合、多くの専門家が、実際には専門家ではないという結論を支持しなければならなくなるとして反対している。また、技能には説明可能性が必ずしも必要ではないが、他方で、道徳性においては、行為の理由が競合する場合、自らの理由を正当化することが必要となるという理由から、徳と技能の類似性において説明可能性を過度に重視することには懐疑的である。

3. 技能とその特性

アナスもスティクターも、徳と技能の類似性について考察し、そうした類似性については共に大枠では認めている。両者の違いは、徳と技能がどのような点で似ており、どのような点で異なるかという点に関する解釈にある。他方、彼らは共に、技能とコツが異なるという点で意見が一致しているが、コツについての考察はそこで止まっている。そこでここでは、技能とコツとの関係を考慮に入れながら、アナスが提案する技能の三要素に即して考えてみよう。

3.1 教示可能性－技能とコツ

アナスが主張するように、現代のわたしたちも一般に、技能 (skill) とコツ (knack) は区別されると見なしていると言ってよいであろう。その場合、技能は専門的な知識に裏づけられた技術 (を有すること) を意味し、コツは、知識よりもっぱら経験によって実現される技術 (を有すること) を意味する。以下では、アナスが本物の技能の要件として挙げる教示可能性、統一性、説明可能性という観点から、技能とコツについて考察する。

まず教示可能性について考えてみよう。一般に、技能が教示可能であるのに対して、コツは教示不可能であるとみなされる。スティクターの引用していたブルームフィールドの例においても、料理は技能ではなくコツにすぎないということが示唆されていた。その場合料理は、知的構造を持たず教示不可能なもの、すなわち、もっぱら見て学ぶか自らの感覚で身につけるしかないものということになる。確かに、もっぱらコツに属すると考えられるタイプの活動と、もっぱら技能に属すると考えられるタイプの活動は一応分けることが出来るように見える。しかし他方で、人の活動は技能かコツのいずれかでしかないのではなく、どちらでもありうるとは考えられないであろうか。

ブルームフィールドは料理がコツであるという説明をしている個所で、ジャグリングの方が分かりやすいかもしれないと補足している (Bloomfield 2000, p. 26)。わたしは、もっぱらコツの例として考えるには、ジャグリングの方が適切であると思う。なるほどジャグリングのように、ほぼ身体感覚や経験によって身につけられるように思われる技術 (コツ) と、医療技術のように専門的な知識が必要とされる技術 (技能) がそれぞれ存在していると、一般には認められているように思われるからである⁽⁴⁾。

しかしこのように、対象ごとにコツと技能を振り分ける仕方でのみ考えると、同一対象についての技術が、コツも技能も含む可能性が見えなくなるのではないか。料理を例にするなら、ある人にとってその技術がコツだけである場合があるだろう。普通の人を作る料理であれ、プロの料理人が作る料理であれ、ほぼすべてがコツと呼ばれるべき仕方では身につけられるということが確かにありうる。そして、コツによって身につけられた技術においても、初心者と熟達者の区別はある⁽⁵⁾。

他方で料理に関して、いわば「技能」が必要とするような要件を満たしながらその技術を身につける人も存在しうるのでないか。そうした料理人は、経験的に得られた技術やノウハウだけではなく、それらを素材、調理方法、栄養などに関して理論的に考え、全体としてそれらを調和させる形で調理に反映させるであろう。さらに優れた料理人であれば、その食事がなされる場所や状況、食事をする人 (たち) 自身の状況についても、考慮に入れるであろう。こうした仕方では調理する料理人は、単なるコツだけを身につけてそれを行使している人ではなく、一定の技能を身につけそれをを用いている人だといえるのではないか。

このように、ある対象が技能とコツの両方を含む可能性について考えると、それらの違いは対象の違いではなく、むしろある技術を身につける方法の違いにあるのではないかと思われてくる。技能とコツを両極端に置く解釈は、活動をそのどちらかにカテゴライズせざるを得ないので、その間にあるコツも技能も含む事例を見えなくしてしまう。

さらに、わたしたちの活動一般に熟達性があると考えたとすれば、その活動を行う方法が変化する可能性もあるのではないか。つまりある活動が、当初はコツのみでなされていたが、技能の三要件を満たすような知的な構造を身につけて、技能化するという可能性である。そしてそのようにして身につけられた活動における技能は、身体感覚などに支えられた知的とは言えない技術（コツ）を含み、それが随所で用いられるであろう。つまりそのような場合、技能とコツは対立するのではなく、むしろ融合し補完し合うということになる。技能として考えられる場合の料理は、このような例として考えられないであろうか。

他方で、もともと技能に分類されるような活動に関してもコツの関与は考えられそうである。とりわけ、何らかの手技を必要とするような技能は、初心者から熟達者に至るまでの間にコツとまったく無関係でいられるとも思えない。卓越したコツを身につけているその道の熟達者が技能を持っているとは必ずしも言えないが、卓越した技能を身につけているその道の熟達者は卓越したコツをもまた身につけていると言えるのではないか⁽⁶⁾。技能とコツを対象によって完全に分けてしまうと、このように考えることができなくなるかもしれない。

3.2 統一性

技能が統一性（統一的把握）を持つとはどういうことであろうか。それは、技能を構成する個別の技術が、それぞれ独立に存在するのではなく、それらが相互に関連し合い、かつ何らかの仕方ですべて統一的に把握されているということである。技能は一定の具体的な目的を持ち、その目的を実現するために必要な個別の技術を持つ。技術の工程が複雑になるほど、それらは互いに無関係ではなく、相互に関連付けられ、全体として把握される必要がある。たとえば、ある人が自動車の運転に関して卓越した技能を持つという場合、その人が、アクセルやブレーキ、ハンドルの操作技術を統一的に把握し、周囲の状況に応じた操作ができることを意味する。仮に、アクセルとブレーキの技術は優れているがハンドル操作に難があるとか、自動車そのものの操作技術は優れているが周囲の状況をよく見ることができないとかの人がいるとしたら、わたしたちはその人を、「卓越した運転技能を持つ人」とは呼ばないであろう。そうした人を卓越した技能を持つ人と呼ぶには、何かしら足りないところがあると思うからである。この場合、わたしたちは予め何らかの卓越した運転技能に関するイメージを持っており、それは複数の個別の技術が統合されたものとして把握されている（統一的把握）。そうしたイメージは、それぞれの活動において卓越した技能とそうではないものを比較可能な程度には区別可能なものとみなされており、それに向かって進むべき統制的理念として理解されているということもできる⁽⁷⁾。

アナスは、一方では本物の技能には、初心者と熟達者という違いがあると説明しており、他方では、技能には統一的把握が必要で、それがなければ全く技能がないのと同じだというソクラテス的な解釈を採用している。しかし、技能の統一性についてのこの強い主張を受け入れると、本物の技能には初心者と熟達者の違いがあるという説明との間に齟齬が生じる。つまり、世界には本物の技能を持つも

のと、まったく技能を持たないものしかない、ということになるが、他方で、本物の技能には初心者と熟達者がいるという点の説明がつかなくなる。この点はスティクターが指摘していることは妥当だと思われる。

このことは、わたしたちの通常の技能観にもそぐわない。わたしたちはふつう、特定の技能について考える場合、アナスほどは極端に考えていないように思われる。つまり、初心者から熟達者に至るまで、技能の熟達度に応じて技能にはレベルが存在することを認めている。そしてその意味で、熟達者以外に「まったく技能がない」とまでは考えていない。完全ではないにせよ、それぞれのレベルで相応の技能があると考えるのが普通ではないか。

この二つの考え方を整合的にするなら、技能には初心者と熟達者という区別があり、本物の技能あるいは完成された技能には、技能に関する統一的把握が必要であり、それを完全に身につけた熟達者のみが本物の技能を身につけていると言える、と考えるべきではないか。そして本物の技能を身につけているものは当該技能に関する高度な熟達者であり、それより劣る中堅レベルの技能を身につけたもの、部分的な技能を身につけたもの（初心者レベル）というような仕方、技能の熟達度にはレベルがあると考える方が普通の技能観にも適合しているように思われる。

アナスは、徳と技能の類似性を考える場合に、技能の特徴を事柄それ自体に即して分析しそこから徳との類似性を考えるのではなく、アナスが既に持つ徳の定義からスタートして、それに当てはまる技能の性質を探しているように見える。それゆえ、技能一般についての分析が不足しているというスティクターの指摘にはもっともなところがある。ただしアナス自身は一貫して、そうした網羅的な技能の分析は、徳を技能との関係で考える場合、ソクラテスの議論においても、自身の議論においても不要であると考えている。

一般的に言って、技能にせよコツにせよ、熟達者ほど自分の現状に満足せず（完全であるとは思っておらず）、より完全（統一的把握）に近づくための努力を惜しまない傾向があるように思われる。ボウイ（Bowie, N.）は、そうした態度それ自体が、専門職を特徴づけると考えており（Bowie 2005, p. 10）、それを本稿で論じているような、優れた技能を持つ人の特徴とみなすこともできるであろう。

以上の検討からわたしは、技能には一定の統一性が必要であることには同意するが、完全な統一性を持たないものはまったく技能を持たないという意味での「強い統一性」解釈には同意できない。

3.3 説明可能性

技能には初心者と熟達者がありうるという考え方をとる場合、そこには技能の発達という観点が含まれている。アナスもそれを認めていると思うが、少なくともアナスの論文では、技能の発達についてほとんど論じられていない。この点については、スティクターも言及しているように、ドレイファスらによる「スキル獲得の五段階モデル（ドレイファスモデル）」と、それを看護の領域に適用したベナーの議論が参考になる。

ドレイファスらは米国空軍パイロットへの調査によって、技能における熟達性についての段階（stage）モデルをつくりだした。ドレイファスモデル（Dreyfus & Dreyfus 2009）⁽⁸⁾によれば、技能は、「初心者」（novice）、「新人」（advanced beginner）、「一人前」（competence）、「中堅」（proficient）、「達人」（expert）という五段階で発達する。技能の発達における程度の差を認めるとすれば、それは、技能に関わる説明可能性とも関係がある。

ドレイファスらは、アナスが賛成するソクラテス的な知性的技能モデルは、経験に基づく直観的な実践を除外している点で不足があると考えている。他方、ドレイファスらは、アリストテレスが、普遍的な原則があったとしても、直観的スキルはそれぞれ個別の事例に原理がどのように適用されるかを見極めるために必要だと主張していることを支持して、経験や直観を重要視している。ドレイファスらは、ソクラテスやアナスが知性的技能モデルの例として挙げる医療技術に関しても、その中に「理論が、具体的な症例、診断、治療と衝突する分野がある (Dreyfus & Dreyfus 2009, p. 5)」と主張している。

ドレイファスらは、理論と実践のどちらが優位にあるかという発想をとるのではなく、それらが相互に関連していると考えべきだと指摘する。彼らは、「医学実践やそのほかの科学領域での実践と同じように、看護は理論と実践の特別な組み合わせなのである。そこでは、理論が実践を導き、実践が理論に根拠を与える。そこではどちらがより優秀かという哲学的な試みは無意味なのである。… (中略) …看護は、理論的合理性のもつ力と限界の両方を特に明らかに示してくれる技能だと言えよう (ibid., pp. 16-17)」と述べている。看護がそのような例の一つであることを認めるならば、比較的単純な技能と極めて複雑な技能がどう異なるか、また、それぞれにおける初心者と熟達者の違いについても、より整合的に説明がつくであろう。

ドレイファスモデルを利用して看護師の熟達性について検討したベナー⁽⁹⁾は、規則や原理の役割と技能の熟達性との関係について、ドレイファスらと同じ線で論じている。ベナーによれば (Benner 2001, pp. 20-22)、初心者は、経験が不足しているので客観的で測定可能なデータに頼り、状況の前後関係を必要としない原則を学ぶ。しかしこのレベルには明らかに限界があるとされている。ベナーは、ドレイファスモデルを個人の特性や才能を測るモデルではなく、状況対応モデルだと説明している。他方、熟達者は分析的な原則 (規則、ガイドライン、格率) には頼らない (ibid., p. 32)。そして、判断や行為の理由についても、熟達者には行為の理由を明示できないことがありうる (判断が極めて直観的に見える)。ベナーは、達人とよばれるような人の特徴の例として、チェスを挙げている。チェスの達人は、その人の絶妙な指し手について問われても、「それが正しそうに見えたから」とか「良い手のように見えたから」としか答えられないことがよくあるという。そして、達人看護師と言われるような人の場合も、臨床実践においてこれと同じようなことが生じるというのである (ibid.)。アナスなら、チェスも看護も本物の技能ではないと説明するであろうが、こうした実証的な研究は、技能とその熟達度が、理由の説明可能性とは必ずしも直接に結びつかないことがあるということを示しているように思われる。

このような状況を極めて単純化して言えば、次のようになるであろう。技能に関して初心者は原理や規則を知識として学び、まずはそれを目の前の出来事に適用しようとするが、経験に基づく直観が不足しているので、いつそれらを適用し、いつ適用すべきではないのかについて、判断がつかない。一人前や中堅になるにしたがって経験が蓄積され、達人になるころには、傍目から見ると原理や規則のことをほとんど配慮していないような直観的判断をしているように見えるようになる。達人は、うまく対処したとみなされる判断や行為の理由について、理論的には明確に説明ができないことがしばしばある。しかし説明ができないという事実だけをもって、この状態を単なる経験や直観に基づくコツでしかないとも言えないであろう。ベナーはこのような状況を、原理や規則が背後に退いているというよりは、原理や規則に関する知識と経験に基づく直観が融合した状態と評していた (ibid., p. 37)。

技能とその説明可能性に関して、それぞれの立場を簡単に確認しておこう。アナスは、活動において行為の理由を説明できなければ、基本的にそれは（本物の）技能ではないとみなす。徳においてもそれはまた同様である。スティクターは、技能には説明できないものもあることを認め、徳と技能がその点において異なると考える。わたしは、徳と技能は似ており、技能には説明できない部分があることを認める。しかし他方では、徳も技能と同様に説明できない部分を含むのではないかという見込みを持っている（ただし徳に一定の統一性がある点は認める）。

4. まとめ

本稿では、徳と技能の類似性に関するアナスとスティクターの議論を手がかりに、徳と技能の類似性をどのように考えるべきかについての予備的考察を行った。そのために本稿では技能とコツについて中心的に検討した。その結果確認されたのは以下のとおりである。1) アナスもスティクターも、徳と技能の類似性がある程度認めており、それらがコツと異なるという点では一致していること、2) 両者ともに、技能とコツの違いについては認めるが、技能とコツの関係性については詳しく論じていないこと、3) 一見してそう考えられるほど、技能とコツの関係は単純に相反するものではないこと、4) 技能とコツの関係を踏まえると、技能と似ているとみなされる徳についても、経験や直観に基づくとされるコツの観点からの検討も必要になるのではないかということ、以上である。

本稿は、「専門職の倫理的熟達性に関する研究」、日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 研究代表者・田中朋弘（2020年度－2022年度、20K00012）の研究成果の一部である。

注

- (1) 本稿では、(Annas 2011) や (Stichter 2018) は検討の対象としていない。
- (2) ここでは、この文脈で論じられる skill という語を「技能」と訳す。ギリシア語の *technē* に相当する語として、アナスは主として skill という訳語を用いるが、*technē* は、'craft'、'expertise'、'art' とも訳されうると説明している (Annas 1995, p. 237 and p. 241)。また、部分的には、'skill or craft' という形で併記したり、いわゆる職業的な技能について説明したりする箇所では、'craft' という語だけを用いている (ibid., p. 237)。日本語では、技能、技術、技法、技、～術、～法などの訳語が考えられるが、ここでは特定の目的を実現するために必要とされる技や方法のことを「技術」と呼び、それを実現する能力という意味で「技能」という語を用いる。
- (3) 徳については、その場面でなすべきことを言葉で説明するよりも、その状況において「際立った (salient) 事実」としてそう見えるというような仕方では説明できないこともあるとみなされる (McDowell 1979, pp. 344-345)。ただ本稿では、技能とは何かについての考察をコツとの関係を中心にして行ったため、徳と技能が説明可能性に関してどの程度密接に類比できるのかについては、徳に関する別の検討を要する。
- (4) この区別はなお一応のものである。ジャグリングにも知的構造があり、逆に医療技術にも知的構造以外のコツが含まれるという解釈もありうる。後者については特に、わたしはドレイファスら同様、そういう解釈が適切だと考えている。
- (5) 専門職研究の文脈では、両者の違いは素人と職人の違いとみなされる。本稿の文脈で言えば、職人は

コツを高度に身につけた人であり、専門職は技能を身につけた人である。専門職に関しては以下で分析したことがある。(田中 2009)

- (6) 卓越した技能を持つ者がコツをまったく持たないという事例が人の場合は思いつかないが、ドレイファスらが紹介している、医療分野におけるコンピューター診断（現在ではディープ・ラーニングに基づくAI診断）などは、その例として挙げられるかもしれない（Dreyfus & Dreyfus 2009, pp.5-6）。あるいは、自動車の自動運転などもそれに相当するであろう。ただしそれらを技能と呼んでよいのかについては、なお疑念は残る。
- (7) 徳の統一性に関する議論については本稿では詳しく立ち入ることができないが、ハーストハウスは徳に関して、このような技能の統一的把握に近い解釈を持っているように見える（Hursthouse 1999, pp.153-157）。ハーストハウスは、徳が完全に統一されている状態が現実にはないことを認めながら、それでもなおわたしたちが、実際には徳が統一されているイメージに基づいて徳の統一的な実現を期待していることを示している。そこでは、ある徳が達成されているのに別の関係する徳がまったく達成されていない状態に対してわたしたちが違和感を持つのは、そうした統一性を信じているからだと説明されている。
- (8) ドレイファスらの「スキル獲得の五段階モデル」については、(田中 2018) で検討した。ドレイファスらは、1980年代から2009年までの間に少しずつレベルの名称を変更しているところがあるが、基本的には五段階説を維持している。
- (9) ベナーのケアリング論についても (田中 2018) で規範倫理的な観点から検討した。ベナーは技能における熟達性だけでなく倫理的熟達性についても論じているが、特に後者については、あまり詳細には論じていない。

引用・参考文献

- Annas, J. (1995) "Virtue as a Skill," *International Journal of Philosophical Studies* Vol.3(2), Routledge, pp.227-243.
- (2011) *Intelligent Virtue*, Oxford University Press. (J・アナス『徳は知なり：幸福に生きるための倫理学』相澤康隆訳、春秋社、2019)
- Anscombe, G. E. M. (1958) "Modern Moral Philosophy," *Philosophy*, Vol. 33, No.124 (Jan., 1958) , pp. 1-19.
- Benner, P. (2001) *From Novice to Expert: Excellence and Power in Clinical Nursing Practice*, Prentice-Hall. (P・ベナー『ベナー看護論－初心者から達人へ [新訳版]』井部俊子訳、医学書院、2005)
- Benner, P., Tanner, C. and Chesla C. (2009) *Expertise in Nursing Practice: Caring, Clinical Judgement, and Ethics*, second edition, Springer Publishing Company. (ベナー、タナー、チェスラ『看護実践における専門性』早野ZITO真佐子訳、医学書院、2015)
- Bloomfield, P (2000) "Virtue Epistemology and the Epistemology of Virtue," *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 60, No. 1, pp. 23-43.
- Bowie, N, (2005) "Are Business Ethics and Engineering Ethics of the same family?" in *Engineering Ethics*, edited by Michael Davis, 2005.
- Dreyfus, H and Dreyfus, S. (1980) "A Five-Stage Model of the Mental Activities Involved in Directed Skill Acquisition," Washington, DC: Storming Media. Retrieved June 13, 2010.
- (1991) "Towards a Phenomenology of Ethical Expertise," *Human Studies*, Vol. 14, No4 (1991) , pp. 229-250
- (2009) "The Relationship of Theory and Practice in the Acquisition of Skill," in (Benner et al. 2009, pp.1-24)

- Hursthouse, R. (1999) *On Virtue Ethics*, Oxford University Press. (R・ハーストハウス『徳倫理学について』土橋茂樹訳、知泉書館、2014)
- McDowell, J. (1979) "Virtue and Reason," *The Monist*, Volume 62, Issue 3, 1 July 1979, pp.331-350. (J・マクダウェル「徳と理性」、『徳と理性』所収、大庭健監訳、pp. 1-42、勁草書房、2016)
- Stichter, M. (2007) "The Skill Model of Virtue," *Philosophy in the Contemporary World* Volume 14, Issue 2, Fall., pp. 39-49.
- (2018) *The Skillfulness of Virtue: Improving our Moral and Epistemic Lives*, Cambridge University Press.
- Van Zyl, L. (2019) *Virtue Ethics: A Contemporary Introduction*, Routledge.
- 田中朋弘(2009)「専門職倫理の道徳的基礎づけに関する一考察」、橘木俊詔編『働くことの意味』、ミネルヴァ書房、pp. 119-141.
- (2018)「ベナーのケアリング論－規範倫理的観点から」、『先端倫理研究』第12号、熊本大学倫理学研究室紀要、pp. 28-43